

昭和六二年七月から昭和六三年六月までのできごと
新チーム構成メンバー

二年生	一年生	六三年四月以降の新入生
マネージャー 三木(丸尾中)	マネ なし	マネ 真鳥(富江中)
選手 主将 月川(横尾中)	選手 岡 (富江中)	選手 田端(清水中)
選手 又村(横尾中)	選手 浜口(深堀中)	選手 岩永(諸富中)
選手 山道(旭中)	選手 永井(佐々中)	選手 山崎(時津中)
選手 竹下(西泊中)	選手 徳永(岩屋中)	選手 池田(横尾中)
選手 小森田(清水中)	選手 田川(桜馬場中)	選手 藤原(桜馬場中)
選手 田中(長与中)	選手 江頭(横尾中)	選手 岡田(岩屋中)
	選手 岡田(岩屋中)	選手 城添(山里中)
	選手 橋本(大瀬戸中)	

七分三分

昔は、練習の手立てをあれこれ考え出し、「なぜそうしなければならないのか」「どうしたらできるよ
うになるのか」「なぜできないのか」等、こと細かに手とり足とり教えていた。そして、細かいことに
気づく自分自身に満足していた。それが少しずつ変わっていった。年を経る毎に練習内容が単純になっ
ていった。ある時、勉強に来た若いコーチから次のような質問をされた。

「ちっともうまくならないんですね、うちの選手。どうすればいいですかね」

私は答えた。

「ハーフコート三対二の練習がちゃんとやれるかい？ もしそれがうまくいってなかったらそれからや
ってごらん。ハーフコート三対二の練習がうまくなったら、きっとその時は強くなっているはずだよ」
「ハーフコート三対二って、あのハーフコート三対二ですか？」

「そう、どこでもやってるし誰でも知ってる三対二のことさ」

私はその若者をからかったのではなく、本気でそう思っていたし、事実私のチームは三対二の練習を
非常に重要視して練習していた。三対二の練習には、ミート・ドリブル・パス・シュートのタイミング
・ディフェンスのカバーリングなどの技術が実に明確にわかりやすい形で表われる。その若いコーチは、
その時は半信半疑のようだったがしばらく経ってからまた勉強に来た。そしてこう言った。

「先生、言われる意味がよくわかりました。やっぱりうちの選手は三対二の練習ですらよくわかってい
ませんでした」

私は言った。

「いや、君んとこだけじゃないよ。みんなそうなのさ。あんな簡単なこと…なんてみんなバカにして
るんだ。三対二なんか、ゲーム前のウォームアップか体育の授業でやる内容ぐらいにしか考えていない

人が多いんだよ」

昭和六二年六月一四日のメモ帳に私は次のように書いている。

『コーチと選手は互いに利用しあつたものだ。互いに発見し、互いに工夫する。コーチの助言は選手が発見するための手助けではない。それ以上のことをしてはならない』

「教えてやる」「俺が勝たせてやるからついて来い」と、いくら力んだところで所詮人間ひとりの力のできることなんてたかが知れているものだ。それならば、選手を指導対象と考えるより仕事仲間と考える方がよい。

「俺が敷いたレールの上を、ハイそうですかと進んでいくだけではだめだ。七割方の仕事とだいたいの方向付けは俺がやる。しかし、三割はおまえ達が受け持て。俺だって見逃しや錯覚がある。絶対の信頼は危険だよ」

この日、私は選手にそう言った。それは、自分の責任分野を選手に押しつけようとしたのではない。人間ひとりがやれることの限界を冷静に考えてみた上で達した結論である。

心理学のこぼしがある。誰かがムカデに質問をした。

「ムカデさん。あなたは歩く時はいつも、動かす足の順番はちゃんと決めて動かしてるのかい？ いやね、よく自分の足にからまつたりしないもんだなあと、いつも気になってたからさ」

するとムカデさんは、「ん…？」と言ったまま一歩も歩けなくなってしまった。

心理学用語では、これを分析マヒと言つてさうである。無意識でやっているからこそうまくっている。それに理屈をつけてあれこれ考えるから返つて混乱をきたし、行動に移す前に過程や結果のことが気になって金縛りにあつてしまつたわけだ。

若くて勉強したての頃は自分が勉強した知識をふりまわしたくて、いろいろやった。無理して難しい用語を使い、難しい練習方法を考え出して満足していた。それは、若い頃には誰でもあることだからしかたがないことだと思う。しかし、今こうして振り返つてみると、三〇才代はおるか四〇才代の前半でもまだそれが残っていたのに気づいた時はショックだった。

リクルート合戦

清水中学校からは過去五人の選手が来ている。最初が昭和五六年。当時監督をしていた米沢先生の推薦によるものだが、米沢先生が転勤になった後もこの六年間に四人の選手が来ている。その清水中学校が今年強い。三年生の田端と二年生の松山が中心だがふたりとも県下で五本の指に入る選手である。お得意先にこんな選手が出て、私はとても心強い思いをしていた。

しかも田端は、ミニバスケケットをやっていた頃から鶴鳴でバスケケットをやりたいと思っていた選手だということが私の耳にも入っていたから、もう田端のポジションは空けてチームづくりをしていた。ところが、それからが大変だった。それまで五人もの選手が来ていた当時は何の問題も起こらなかったが、田端が大物だけに地元の数人の人が大物素材を流出させないよう動き出したのである。まずヤリ玉にあげられたのが夏休みに田端を呼んで練習させたことだった。幼なじみのような軽い気持ちと即戦力を期待しての焦りが混乱を招いた。

部活動の担当教師も学校も正式に学校を通さずにそんなことをしたというのでつむじを曲げてしまった。田端本人にもプレッシャーをかけられる。親も、コーチも立場上苦しくなってきた。いろいろ都合なことが起こった。私はそうなるべしと動きを押さえているしかない。とにかく、田端自身の決心

が固いことから、他からひっくり返される心配はないし、本人が鶴鳴でやりたいという強い気持ちを持っているのだから、学校側がそれを受理しないということもできいわけで、多少いやな思いをしてももう黙っている方がいいと思つてじつとがまんしていた。

それはともかく、田端が鶴鳴に来るのは確実なので来年以降は強いチームが創れると思ひ、私はリクルートに積極的になった。第一章『固執』で述べたように、県外には手を出さなかつたがお隣の佐賀県に出かけて行つた。少し線が細いが、長身でシユートのうまい選手がいた。つてを頼つて情報を得ると、本人は地元に残りたくないと言つてるといふ。親元から離れてバスケットをやりたいらしかつた。私はすぐに飛んだ。一〇月だつた。その時はすでに、地元の佐賀清和はもちろん他県からも二校が入り込んでいた。私が飛び込んだ時は、N高校に行きたいという気持ちで固まつているらしかつた。私はもっとも遅く交渉に入り込んだくせに何回も足を運んだ。その結果、岩永は全国でもハイレベルの高校からの勧誘を振り切つて、県大会でも二位止まりが続いている鶴鳴でバスケットをやると言つてくれたのである。

最後の訪問の時、「こいつはウンといいそつだな」という感じがあつたが、岩永はウンという前に私に質問をした。「先生、来年は純心に勝てますか？」私は内心ムツとした。と同時に、勝負の世界は勝たなければみじめだとつくづく思つた。こんな、自分のこともみたいな歳の選手から、こんなことを言われるなんて……。しかし私は悔しさをじつと抑えて笑顔で、「勝つさ。勝つとも。そつでなきやわざわざこつして県外まで選手募集のために出かけてくるもんか」と言つた。

ところが、それからがまた大変だつた。岩永のコーチの重松氏に迷惑がかかることになつたのである。清水中学校と鶴鳴のように、どこの学校でも互いにひいきの学校がある。諸富中学校も同様、過去に全国中学大会で守山中学校と決勝を争つたことのある名門中学校だから、つながりの深い高校がいくつもある。その、今までつながりの深かつたT高校から意地悪の連発を食らつた。T高校の監督は重松氏に対して急によそよしくなり、まつたく往来がなくなつたばかりでなく、挙げ句の果ては事実無根の話でデツチあげてあちこちで言いふらされた。「いいんですよ、気にしなくて。不正なことや義理を欠くことは何もやってはいないんだから」と、重松氏は言つたが、リクルートにからむこの種の問題には毎年うんざりさせられる。

レイ

田端・岩永以外にも、長崎市内の中学から四人、近郊の中学からひとり、離島からひとり、計八人のリクルートが成功。だが一方、新チームに切り替つたメンバーは、月川(G)・山道(F)の二年生ふたりと岡(F)・浜口(C)の一年生ふたり。それに辛つじてスタメン入りの又村(G(二年生))でやつとチーム構成ができる有様だつた。しかも、又村は新入生が来た時点でエントリーからはずし、頭が切れる選手だつたので現役コーチに昇格させた選手だから、新入生が来るまでは実質四人半で八ヶ月をしのがなければならぬ状態だつたのである。

この、四人半で臨んだ県新人戦は純心と戦う前に負けた。負けた相手が西海学園であつた。西海学園は佐世保地区のナンバーワンだ。田端のいる清水中学校は佐世保にある。もっとも負けてはいけないうちチームに負けてしまつた。所帯が苦しくて何であつても、世間が知るのは、鶴鳴は決勝にすら残れなかつたという事実と西海学園に負けたという事実だけである。

私は、「せつかく八人もの選手がリクルートできたのに、蓋を開けたら五人になつていたなんてことにならないだろうか」と、不安になつた。そんな不安を抱えたまま、私は部報の報告に次のように書き

た。

「この冬、浜口がどれだけ伸びるかでこのチームの将来が決まります」

浜口のニックネームはレイだった。それは私がつけた。鶴鳴の鶴は英語でCRANE(クレイン)起重機という意味もある)である。熊谷が卒業して以来一七五センチを越える選手はこの浜口しかない。熊谷に比べたら素質が雲泥の差だったが、久々の大型選手なので鶴鳴を担う選手になって欲しいという願いを込めて、クレインのレイをニックネームとしたのである。

浜口は筋肉の素材が悪く、体重超過を元に戻すのに時間がかかったということには前に述べた。体重超過は秋には元に戻った。しかし、筋肉の質はおそまつだった。長年選手を見ていればわかる。浜口の筋肉は鍛えても決して速くも強くもならない筋肉だった。ほんとはなし、彼女の筋肉はどうなっているのか、顕微鏡で専門家に鑑定してもらい、研究したいと思ったこともある。

それはともかく、筋肉の質がよくないのは明らかだったので、それを強くすることには力を入れず、センターとしての技術を身につけさせ、自信を持たせようとした。教える技術は、シールして相手と争わせるプレイを除いた。接触の多いプレイは筋肉が軟弱なので不利だと思ったからである。プレイの主体は、まわりの選手が仕掛けたプレイに合わせるタイミングの取り方を覚えることであつた。なかでも、表と見せて裏をつくプレイを多く取り入れた。そのプレイの指導担当は三生の峰と秋田だった。ふたりは、毎日つきつきりで浜口の面倒を見た。

冬休みのスクリメージでその効果はつきり現われ始めた。味方のボールになったらとにかく彼女はベースラインめがけて走る。相手が守らないうちに、ガードからパスをとばしてもらってシュートしようというわけである。それを抑えられたら今度は、フラッシュしてボールをもらいシュートを狙う。足が遅いのには走らせるという発想そのものが変だと言われるかもしれないが、相手とガツプリ四つに組んでから出し抜いたりシールして勝つ筋肉は持っていないのだから、相手より先に動かなければ勝ち目がない。

彼女は口数少なくおとなしい性格でまじめだから、速くはないけれども毎回必ず走る。だから、相手が油断しているとガードからピュッとパスが飛んで点になる。そんなことがしばしば起こるようになった。そうこうしているうちに彼女は縦パスが通るかベースラインからフラッシュした方がいいか、判断してプレイできるようになった。それで点を取るチャンスがなければ、あとはまわりのプレイヤーが仕掛けるチャンスを待つて合わせればよいだけである。

一月中旬、九州春季大会県予選の時、彼女は話題の中心になった。「先生、どうしたんですか？何やらせたの？」私に質問をする人は決まってそう言った。「決まった！」というシュートをポロツと落したり、ちよつと相手接触したらヨロツとするのは相変らず残っていたが、危なくて見ていられない浜口から何かやってくれとるかもしれない浜口に変身したのである。

この試合の後、私は峰と秋田を誘って繁華街に出た。

「あいつは俺がうまくしたんじゃない、おまえたちがうまくしたんだよ」

私はふたりを労って、アクセサリー店でブローチを買ってやった。

私が嬉しかったのは、浜口が自分の進路を決定する時だった。自分の素質を知っていた彼女は二年生の終わりまで、バスケットは高校でおしまいと決めていた。しかし、一応一七六センチの彼女にはすでに三社の実業団から申し入れがあつた。夏、私が彼女にそのことを聞くと、「近頃になって実業団でやってみようかなあという気になってきました」と彼女は言った。そしてさらに、「私は今まで何をすることも優柔不断でした。何かはつきりと決断しなければならぬ時にはいつも親がいて、それに頼ってはかりました。だから、親元を離れて自分を試してみたいと思います」と付け加えた。

地元の実業団からも声がかかっていたが、私はそのチャレンジ精神が嬉しくなってさっそくその方向で動いた。そして、浜口は東京の実業団に決まった。人というものはいつどこで転機が訪れるかわからないものだ。すごい選手にならなくてもいいから、これを契機に強くたくましい人間に成長していつくれればいいと思っている。

目玉新人

新学期が始まってすぐ行われる春季選手権大会。過去において、これほど楽しみな気持ちをもって臨んだ試合はない。なぜなら、何ら手を加えないでそのまま試合に出せそうな選手が6人もいたからだ。誰を使おうか、誰までをエントリーに入れようかと賢沢な迷いがあれこれと生まれる。

私がおっとも期待していたのは田端と岩永だった。田端は佐世保から、岩永は久々の県外リクルートで佐賀からとってきたことは前に述べた。その田端が春季選手権直前の練習で右ふともも裏側の肉離れを起こしたのである。大誤算だった。春季選手権は佐世保で開催された。田端はカツコよくデビューさせたかった。それがダメになった。

岩永も期待はずれだった。というより、私の考えが甘かった。岩永にはパワーがないことはわかっていた。だから、ポストでシールしてのパワープレイは期待していなかった。しかし、すこしはインサイドでプレイできるだろうと思っていて、それが全くダメだとわかったのである。筋肉の質が鍛えてもどうにもならないものだった。シュートが柔らかいのでアウトサイドシューターにしなければ生きる道がないということがわかった。

まず、田端について述べよう。田端はこの肉離れを皮切りに3年間ケガに泣いた。

この肉離れはドリブル1対1の練習で、右から左にドリブルをチェンジした瞬間に起こった。練習はさほど激しいものではなかった。肉離れと判明した時、「一ヶ月はダメだな」と私は思った。一ヶ月となれば、六月はじめの高校総体に間に合うかどうかというところだ。久々の大物だけに使ってみたくてしかたがない。だから、直前までリハビリに専念させ、高校総体にはぶっつけ本番で出場させた。少し痛みはあったが何とかプレイはした。ところが、試合後また痛みがぶり返した。その痛みが何日も取れない。再度医師の診察を受け、念のためX線撮影をしたら、何と、恥骨に疲労骨折が起きていた。

肉離れの方は心配なかったが、復帰目指してのリハビリに無理があったようだ。恥骨の疲労骨折は、私も長年指導者をやっているが初めてだった。現像されたフィルムにはクッキリと骨折線が映し出されており、それが端から端まで横断していた。これまで見た選手の疲労骨折のX線像は、ほとんどが骨膜が腫れている程度のものであった。骨折線があっても、肥厚した骨膜から少しだけ中心部に向かって亀裂がはいっている程度のものであった。田端のそれは、完全に骨が左右に分離しており痛みもかなりのものだったはずである。

私は、腰椎の分離症を思い浮かべた。腰椎分離症は慢性的な疲労骨折のために椎弓が分離してくっつなくなかったものである。田端のそれを見ながら、もしこの骨折線の部分がくっつなくなると偽関節状にでもなったらやっかいだ。私はおそろおそろ医師に聞いた。しかし、医師はそのことは否定してくれた。ほっとしたけれど、これでまた二ヶ月はダメだ。

結局田端は、四月から八月までの五ヶ月間満身に練習できなかった。だから、田端のデビュー戦は十一月の県新人戦だった。八ヶ月遅れのデビューである。その新人戦の一回戦の試合前、ウォームアップの三対二をやっている田端はリバウンドボールを取って着地した瞬間、他人の足の上に乗って足首を捻挫した。またしてもである。私はもう泣きたくなった。それからまたリハビリ生活だ。

年が明けてからの田端はなんとかケガと縁が切れて、みんなと一緒に練習できる日が続いた。しかし、プレイの切れがなくディフェンスは誰を相手にしても苦も無く抜かれる。一年間ほとんど練習らしい練習をしていないから中学生のままのスピードとディフェンス力なのである。

それでも、技術とセンスがあるから次第に主力選手の仲間入りをしてくる。二年生になった。たいしたケガもないまま八月を迎えた。九州国体で二位に食い込めれば北海道国体に行ける。その九州国体で彼女は大活躍。本国体の出場切符を手にし、彼女も私も目の前にかかっているもやがパーツと晴れたような気分になった。

ところが、高校三年間のバスケットボール生活で、彼女が思い切りプレイできたのはこの九州国体だけだった。その後、北海道国体直前に彼女はまた足首を捻挫し、本国体ではベンチに座っているだけだった。そしてさらに、年が明けた正月の六日、再び肉離れを起こし二ヶ月休んだ。今度は逆の足のふくらはぎだった。それにしても、世の中にはいくらでも不真面目でいかげんなやつがいるだろうに、そんなやつにもっていかず、なぜ、一生懸命やってる者に災難をもってくるのか。神様の気まぐれにもほどがある。

一方岩永は、シュートのリリースが非常にやわらかく、二年になった時は少し余裕を持たせればスリーポイントを確実に決められる選手になっていた。しかし、彼女の悩みのタネは、いくら鍛えても強くない筋肉の質と重症の貧血だった。彼女の活躍の場は、はじめての相手と対戦する時の最初の10分間だけだった。一七七センチもあるからまさかスリーポイントは打たないだろうとみんなが思う。しかし、シューターだとわかると相手はベタベタと密着マークしてくる。そうすると、スタミナもないしパワーもないから彼女は身動きがとれない。あとはベンチである。

筋肉の質はどうにもならない。だから、彼女を使う時はみんなも心得ていて、彼女にボールを渡してももつれそうな場面になるとすぐボールを受けに行つてやり、決して彼女にボールを預けっぱなしにして知らん顔していることはなかった。

それはよかったが、貧血には参った。専門医に診てもらい、鉄剤をもらって毎日飲ませることにしたが、彼女の拒絶反応はとてひどく、薬を飲み続けることはできなかった。貧血になったり貧血の選手を持ったことのある方はわかりだと思いが、貧血は指示された鉄剤を毎日確実に飲みさえすれば目に見えて回復してくる。しかし鉄剤は、ムカムカして吐き気をもよおす副作用もある。岩永はそれが普通の人よりひどくてどうしても飲めなかったのである。だから、岩永のヘモグロビンは増えないまま月日が過ぎた。

彼女が3年生になった時、私はもういちど原研内科（血液専門）の朝長教授に直接電話した。

「おい、岩永の貧血、どうにもならんかねエ。今年で最後だよ」
主任教授だが、私と同級生である。

「よし、ちょうどよかった。新しくフェロミアっていう薬が出たよ。これは副作用が少ないはずだ」ということで、もういちど診察してもらい治療を始めた。今度は効果てきめんだった。彼女の顔色は、練習が進行していくのに伴って、いままでは青ざめていた。それが、薬を飲み始めて二週間チーム練習からははずした後、みんなの中に入れて練習させてみると、いつもならそろそろ青くなるぞと思われる頃、彼女はホットペを真っ赤にしてがんばるのである。

治療を開始した頃は一桁しかなかったヘモグロビンが、沖縄で行なわれた九州大会から帰ってきて測定した時は十二・四グラム、インターハイの前に測定した時は十三を越えていた。十三を越えればもう普通の値である。彼女は三年生の夏まで、実業団から誘いがあっても、卒業したらバスケットはやらなうと言つて断っていた。それが夏休みに変わった。

一七七センチのシューターならば少々体力がなくても魅力がある。彼女は日本リーグ一部のチームからの誘いで九州を出た。一方田端は、高校三年間ケガ続きで満足な活躍をしていないがために、彼女の素質がみんなの目にとまる機会がなかった。

「インターハイが終わってから進路を決めます」

岩永と違って、卒業後も思いつきりバスケットをやっていた田端は、今まで大した活躍をしてない自分には実業団からの誘いが少ないことをよく知っていた。だから、インターハイに賭けた。インターハイで活躍すれば実業団のスカウトの目に止まる。声があちこちからかかってくるにちがいない。そういう思いを込めて臨んだインターハイだったが、秋田経法に一回戦で負けた。

結局彼女は地元の日本リーグ二部のチームでプレイを続けることになった。彼女は地元に残ることを本意だとは言わない。しかし、結局は地元に残る運命だったとしても、もっともっとみんなの目にとまる活躍をしたかったにちがいない。

練習はいつもトーナメント

昔は、練習が終わって体育館を出るのはバスケットボール部が最後と相場が決まっていた。そして、それが自慢だった。バカげたことに見栄をはっていたものだ。

今は違う。練習が3時間を越えることはほとんどない。練習の出来が悪くてもである。「よし、ラスト一回」と言って、五対五やスクリメージをする。昔は、うまくいかなかったからもう一本とか、成功したけどなにかすつきりしなかったからもう一回だと言っずると練習をひっぱることがよくあった。

もし、読者の中でこのようなことをやっているコーチがいたら、明日からといわず今日からすぐにやめた方がいい。スカッと終わりたい、成功して終わりたいという気持ちはわかる。しかし、それはコーチの自己満足以外の何物でもないのである。

私そのやり方をやめたのは、最後にうまくいったら練習がうまくいったように錯覚されては困ると思ったからである。それまでさんざんミスばかりしていたのに、最後に二―三回うまくいったからといって満足げな顔をされてはたまったものではない。

それより、うまくいかなくて終わった時、なんのコメントも出さずにただ「終わり」と言ってその日の練習を終われば「まずかった」という思いが明日の練習開始まで選手の頭に残っている。その方が、無理やりうまくいかせてその日の練習を終わるよりも、選手には長い時間プレッシャーがかかるではないか。それがいやだから、選手は時間内にどうしてもよい結果を出して終わりたいと思うようになるだろう。

「いや、うちの選手なんか、そんなことしたら返って早く終わったのを喜んでちゃうよ」という人がいたら考えを改めてもらいたい。自分の教育が足りないことを反省してもらいたい。一生懸命練習している選手なら、誰でもまずい終わり方をしたら気持ちが悪く、まずいまま終わりが近づくとしたら、なんとかして挽回しようと努力するはずである。いや、こう言っている私のチームにも早く終わったのを喜ぶ選手がいるかもしれないけれど、自分の選手をそこまで疑うのは寂しすぎるではないか。

試合は四〇分。トーナメントなら、負ければ次の試合はない。練習も同じだ。「明日があるさ」ではなく、その日の練習を『勝ち』で終わらなければならない。いや、すべてどんな時でも『勝ち』で終わるのは、いろいろな条件があって難しいから、『負け』で終わりそうなのをなんとか『勝ち』に持ち込もうとする努力をしなければならない。その結果、残念ながら『負け』で終わったとしてもそれはそれ

で一試合としての価値、一日の練習としての価値がある。

私はよく言う。

「私は練習が終わってから話ほしない。ミーティングもさせない」

実際、最後のメニューが終了したら、真ん中に集ってエールを組むこともないし、集めて最後の訓話をすることもない。初めて鶴鳴の練習を見に来た人や新入生はこれに面食らう。なにもしないで終わっていいのかなあ、というような顔をして。

練習が終わってしまったから、或いは試合が終わってしまったからウダウダ言っただけでしかたがないじゃないか。言うことがあれば、練習の途中で止めて言う。まだ時間が残っていて、残りの時間の中で治して欲しいから言うのだ。練習は最後の一本がスカツとうまくいったからよいできればえだったのではなく、三時間の中身が濃かったから良いできればえなのである。

スピードとクイックネス

「うちは走れなくてねえ」

こんなセリフはあちこちでよく聞く。その、『走れる』『走れない』がスタミナを指していることもあるし、スピードやクイックネスを指していることもある。が、大半は速効が出せないという意味に使っているようである。いろいろ分類するとややこしいから、『速さ』ということに限定して私の考え方を述べよう。

相手より速くプレイするにはもちろん、絶対的な速さは必要だ。しかし、バスケットボールに於ける速さとは、相対的なもの、つまり、相手と比べて速いかどうかということがより重要なのである。絶対的な速さを競う陸上競技のダッシュでは相手に負けるけれども、相手が歩いている時に走っていいのなら私だってカール・ルイスに勝てる。

バスケットボールと言う速さとは、相手を出し抜くことであって相手とカケッコする速さのことではない。相手が油断している時に急に走り出す、もう大丈夫だと思っている時にまだ走る。そんな駆け引きのことである。駆け引きはダッシュの練習を何回しても、フットワークをいくらやってもうまくはならない。駆け引きは駆け引きの練習をしなければならぬのである。即ち、『読む』力を身につけさせることだ。そうすれば速くなる。そうして、相手を出し抜く面白さがわかってからフットワークをやらせれば意欲的に取り組むが、「まず体力からだ」と言っただけでも三対二も五対五もわからないうちからフットワークをやらせても速さは身につかないと私は思っている。

技術や体力の養成は、このようにコーチの観点でまったく違ってくる。たとえばシュートについて。私は次のように考えている。

シュートで大切なのはフォームだ。フォームさえよければ必ず入るようになると思っている。だから、新入生のシュートフォームは八月の夏休みが終わるまでの間に徹底的に治す。フォームが固まるとあとは実戦でたくさん打たせることだ。即ち、シュートセレクションを理解させることである。フォームがよくて実戦でのシュートセレクションがわかればもう大丈夫。決して、一日に何本打たなければダメだとか、一日の練習にシュート練習は何分入れなければダメだとかいう問題ではないと思う。

技術は半年あれば充分だ

これも考え方のひとつだが、ドリブルにしるパスにしる、バスケットボールの試合をするのに必要な

ひととりの技術を身につけさせるのに、私は半年あれば充分だと思っている。半年だとすれば、一〇月には新入生はキビキビ試合ができるようになってはいるはずであるが、もちろん三年生に比べるとまだヒヨコである。その、二ノトリとヒヨコの差は何かというと実戦の体験の差であって、技術修得に要した時間の差ではないと私は思うのである。

実戦の体験が多いということは、場面の変化に対する対応力がつくということである。だから私は、新入生が入部して二ヶ月も過ぎた頃からどんどん攻防の練習を増やす。一対一・二対二・三対三・スクリメージだ。ドリブルだけの練習、パスだけの練習などはたちまち影をひそめていく。

実際、コーチとして楽しいのは新入生が二応格好がつくまでの半年で、あとはつまらない。なぜなら自分が主役でやる場面がないからだ。練習はじつと見守っているだけの時間が多くなってくる。それは実に退屈なことだ。では、退屈なら選手にまかせておいて自分は引っ込んでおけばいいかというとそうはいかない。じつと見守ってやるのが、教え込むことよりも大切なのである。

人間という生きものは実にいいかげんな生きもので、油断していると楽な方に楽な方にと押し流されてしまうものである。それをじつと見守っていてアドバイスしてやるのがコーチの役目である。

「ほら、背筋がまがってきたよ」

「今のは左にいくところだろうが！」

こんな単純なアドバイスの繰り返しだ。選手もそれはわかっている。コーチの目を盗んでごまかそうなんて考えてる者はいないけれども、つい、めんどくさいことは避けて通り、いつのまにか自分を追及しなくなっているものだ。

その、人間の愚かさを知ってお互いがコートに立った時、初めて信頼が生まれる。

上下関係

月川（三年）・山道（三年）・岡（二年）・浜口（二年）・岩永（一年）のスターティングメンバーで臨んだ高校総体は、七八対三六の大差で純心に負けた。山脇（三年 三洋電機）・曾根（三年 第一勧銀）・山下（三年 鹿屋体育大学）・吉田（三年 鹿屋体育大学）・芦北（二年 三洋電機）をスタメンとする純心は、昭和五八年以来の最強メンバーである。足元にも及ばなかった。

大差で負けたけれども、八人もの新入生がリクルートできたのだから、確実に勢いは鶴鳴に傾いている。実に八年間の辛抱である。

「下級生主体だもんね」

「来年のチームだからね」

と、鶴鳴を知る人はみなそう言った。確かに下級生はいい。しかし、それは素質がいいというだけであって、人間的には未熟だらけなのである。

私がよく言うことばに『腐っても鯛』というのがある。意味は、ケガをして運悪く選手になれなかったり、身体的な素質で下級生に追い越され、レギュラーになれなくても、三年生は下級生に比べれば人間のできが違つということである。

それは、いろんなことで苦しみ、その苦しみを乗り越えた回数が違うからだ。私は、そういう意味で上級生は偉いし、人間的な信用の度合いは下級生とは比較にならないと、常々言っている。

しかし、上級生が無意味ないばり方をするのも私は大嫌いだ。部によっては、上級生が下級生を集めてしょっちゅう説教したり、廊下で会った時はきおつけして「コンチワー」と大声であいさつさせたりする光景をしばしば見かける。そんな光景をみるとむしずが走るし、そんなことを放任している指導者

の資質を私は疑う。そんなことで、人間の上下関係のケジメがつくわけがない。

鶴鳴のバスケット部では、八月上旬のインターハイが終われば、そのあと国体や選抜が残っていても一応世代交代である。キャプテンも二年生に替わる。その変わりようは極端である。

インターハイに臨む列車での座席配置と、終わって帰る時の座席配置とがもつ違つ。帰りの車中では私の周囲の座席は一・二年生が占めるのである。途中の駅でうごんを買つ時は、下級生ではなく三年生がサツとホームに散る。

長崎に帰り着いた翌日からさつそく新チームの練習が始まるが、三年生の働きぶりは大変なものである。まだまだ未熟な下級生を手とり足とり指導する。スクリメージの相手をする。その上、雑用は下級生にはさせず、すべて三年生が引き受ける。引退したOG気取りでゆったり構えている三年生はひとりもない。自分が主役であったつい先日までに勝るとも劣らない真剣な目つきで、下級生の動きを追つ。チームを愛する気持ち、後輩を思つ気持ちがそうさせるのである。それが、卒業の前日まで続く。

こうして育つた下級生は、自分が上級生になった時、同じようにして次ぎの代の下級生を育てる。これは、部活動なればこそできる人間関係であり、他のどの教育の場面でも得ることのできない貴重な財産だと私は思う。